

放
浪
記

新潮社版

定價 五百八拾圓
地方賣價 五百九拾圓

放浪記 昭和二十八年九月二十
六日印刷昭和二十八年九月三十
日發行 著者林芙美子 發行者
東京都新宿區矢來町七十一佐藤
義夫 印刷者東京都文京區西江
戶川町佐藤精亮 印刷所東京都
文京區西江戶川町二光印刷株式
會社 製本所東京都新宿區新小
川町古藪製本所 發行所東京都
新宿區矢來町七十一番地新潮社

目次

第一部……………五

第二部……………一五三

第三部……………二九五

放
浪
記

第一部

放浪記以前

私は北九州の或る小學校で、こんな歌を習つた事があつた。

更けゆく秋の夜 旅の空の

侘しき思ひに 一人なやむ

戀ひしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四國の伊豫の人間で、太物の行商人であつた。母は、九州の櫻島の温泉宿の娘である。母は他國者と一緒になつたと云ふので、鹿兒島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口縣の下關と云ふ處であつた。私が生れたのはその下關の町である。——故郷に入れられなかつた兩親を持つ私は、したがつて旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この戀ひしや古里の歌を、随分侘しい氣持ちで習つたものであつた。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の躰賣をして、かなりの財産をつくつてゐた父は、長崎の沖の天草から逃げて來た濱と云ふ藝者を家に入れてゐた。雪の降る舊正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまつたのだ。若

松と云ふところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覚えてゐる。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の間で、實直過ぎるほどの小心さと、アブノーマルな山ツ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れてゐた人だ。私は母の連れ子になつて、此父と一緒になると、ほとんど住家と云ふものを持たないで暮して來た。どこへ行つても木賃宿ばかりの生活だつた。「お父つあんは、家を好かんとちや、道具が好かんとちや……」母は私にいつもこんなことを云つてゐた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思ひ出を持つて、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一圓を轉々と行商をしてまはつてゐたのである。私がはじめて小學校へはいつたのは長崎であつた。ざつこく屋と云ふ木賃宿から、その頃流行のモスリンの改良服と云ふのをきせられて、南京町近くの小學校へ通つて行つた。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下關、門司、戸畑、折尾と言つた順に、四年の間に、七度も學校をかはつて、私には親しい友達が一人も出來なかつた。

「お父つあん、俺アもう、學校さ行きたうなかバイ……」

せつばつまつた思ひで、私は小學校をやめてしまつたのだ。私は學校へ行くのが厭になつてゐたのだ。それは丁度、直方の炭坑町に住んでゐた私の十二の時であつたらう。「ふうちゃんにも、何か賣らせませうたいなあ……」遊ばせてはモツタイナイ年頃であつた。私は學校をやめて行商をするやうになつたのだ。

直方の町は明けても暮れても煤けて暗い空であつた。砂で漉した鐵分の多い水で舌がよれるやう

な町であつた。大正町の馬屋と云ふ木賃宿に落ちついたのが七月で、父達は相變らず、私を宿に置きっぱなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、さういつた物を行李に入れて、母が後押しで炭坑や陶器製造所へ行商に行つてゐた。

私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三錢の小遣ひを貰ひ、それを兵児帯へこおびに巻いて、毎日町に遊びに出てゐた。門司のやうに活氣のある街でもない。長崎のやうに美しい街でもない。佐世保のやうに女のひとが美しい町でもなかつた。骸炭のザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしてゐるやうな町だつた。駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸蒲團屋、まるで荷物列車のやうな町だ。その店先きには、町を歩いてゐる女とは正反對の、これは又不健康な女達が、尖つた目をして歩いてゐた。七月の暑い陽さしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢きりである。夕方になると、シャベルを持つた女や、空のモッコをぶらさげた女の群が、三々五々しやべりながら長屋へ歸つて行つた。

流行歌のおいとこさうだよの唄が流行つてゐた。

私の三錢の小遣ひは雙兒美人の豆本とか、氷饅頭のやうなもので消えてゐた。——間もなく私は小學校へ行くかはりに、須崎町の粟おこし工場に、日給二十三錢で通つた。その頃、策をさげて買ひに行つてゐた米が、たしか十八錢だつたと覺えてゐる。夜は近所の貸本屋から、腕の喜三郎や横紙破りの福島正則、不如歸、なさぬ仲、渦巻などを借りて讀んだ。さうした物語の中から何を教つたのだらうか？ メデタシ、メデタシの好きな、蟲のいゝ空想と、ヒロイズムとセンチメンタリズムが、海綿のやうな私の頭をひたしてしまつた。私の周圍は朝から晩まで金の話である。私の唯一

の理想は、女成金になりたいと云ふ事だつた。雨が何日も降り續いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちや飯で、茶碗を持つのがほんたうに淋しかつた。

この木賃宿には、通稱シンケイ（神經）と呼んでゐる、坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイトで飛ばされて馬鹿になつた人だと宿の人が云つてゐた。毎朝早く、町の女達と一緒にトロツコを押しに出かけて行く氣立の優しい狂人である。私はこのシンケイによく風を取つてもらつたものだ。彼は後で支柱夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて來てゐる祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を賣るテキヤ、親指のない淫賣婦、サーカスよりも面白い集團であつた。

「トロツコで壓されて指を取つたと云ひよるけれど、嘘ばんだ、誰ぞに切られたつとぢやろ……」馬屋のお上さんは、片眼で笑ひながら母にかう云つてゐたものだ。或る日、この指のない淫賣婦と私は風呂に行つた。ドロドロの苔むした暗い風呂場だつた。この女は、腹をぐるりと一卷きにして、臍のところに朱い舌を出した蛇の文身をしてゐた。私は九州で初めてこんな凄い女を見た。私は子供だつたから、しみじみ正視してこの薄青いこはい蛇の文身を見てゐたものだ。

木賃宿に泊つてゐる夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買つて來て炊いてもらつてゐた。

は、う、ろ、く、のやうに焼けた暑い直方の町角に、そのころカチウシヤの繪看板が立つやうになつた。異人娘が、頭から毛布をかぶつて、雪の降つてゐる停車場で、汽車の窓を叩いてゐる圖である。す

ると間もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチウシヤの髪が流行つて來た。

カチウシヤ可愛や 別れの辛さ

せめて淡雪 とけぬ間に

神に願ひを ラ、かけませうか

なつかしい唄である。この炭坑街にまたゝく間に、このカチウシヤの唄は流行してしまつた。ロシヤ女の純情な戀愛はよくわからなかつたけれど、それでも、私は映畫を見て來ると、非常にロマンチックな少女になつてしまつたのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行つてもらへなかつた私が、たつた一人で隠れてカチウシヤの映畫を毎日見に行つたものであつた。當分は、カチウシヤで夢見心地であつた。石油を買ひに行く道の、白い夾竹桃の咲く廣場で、町の子供達とカチウシヤごつこや、炭坑ごつこをして遊んだりもした。炭坑ごつこの遊びは、女の子はトロッコを押す眞似をしたり、男の子は炭坑節を唄ひながら土をほじくつて行くしぐさである。

そのころの私はとても元氣な子供だつた。

一ヶ月ばかり勤めてゐた栗おこし工場の二十三錢也にもさよならをすると、私は父が仕入れて來た、扇子や化粧品を鼠色の風呂敷に背負つて、遠賀川を渡り隧道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くやうになつた。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでゐるのだ。

「暑うしてたまらんなア。」この頃私には、かうして親しく言葉をかける相棒が二人ばかりあつた。「松ちゃん」、これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であつたが、間もなく、青島へ藝者に賣られて行つてしまつた。「ひろちゃん」干物屋の賣り子で、十三の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だつた。酒が呑めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇は無料でみられるし、月の出た遠賀川のほとりを、私はこのひろちゃんたちの話を聞きながら歸つたものだつた。——その頃よく均一と云ふ言葉が流行つてゐたけれど、私の扇子も均一の十銭で、鯉の繪や、七福神、富士山の繪が描いてある。骨はがんに、ような竹が七本ばかりついてゐる。毎日平均二十本位はかたづけていつた。緑色のペンキのはげた社宅の細君よりも、坑夫長屋をまはつた方がはるかに扇子はさばけていつた。外にラッパ長屋と云つて、一棟に十家族も住んでゐる鮮人長屋もあつた。アンペラの壘の上には玉葱をむいたやうな子供達が、裸で重なりあつて遊んでゐた。

烈々とした空の下には、掘りかへした土が口を開けて、雷のやうに遠くではトロツコの流れる音が聞えてゐる。晝食時になると、蟻の塔のやうに材木を組みわたした暗い坑道口から、泡のやうに湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあつちこつち扇子を賣りに歩いた。坑夫達の汗は水ではなくて、もう黒い飴のやうであつた。今、自分達が掘りかへした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のやうに空気を吸つてよく眠つた。まるでゴリラの群のやうだつた。

さうしてこの静かな景色の中に動いてゐるものと云へば、棟を流れて行く昔風なモッコである。晝食が終るとあつちからもこつちからもカチウシャの唄が流れて來てゐる。やがて夕顔の花のやうなカンテラの灯が、薄い光で地を這つて行くと、けたましい警笛サイレンの音だ。國を出るときや玉の肌

……何でもない唄聲ではあるけれど、もう、もうとした石炭土の山を見てゐると何だか子供心にも切ないものがあつた。

扇子が賣れなくなると、私は一つ一錢のアンパンを賣り歩くやうになつた。炭坑まで小一里の道程を、よく休み休み私はアンパンをつまみ食ひして行つたものだ。父はその頃、商賣上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすばつてゐた。母は多賀神社のそばでバナ、の露店を開いてゐた。無數に驛からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナ、は割によく賣れて行つた。アンパンを賣りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行つた。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いゝ事がありますやうに。――多賀さんの祭には、きまつて雨が降る。多くの露店商人達は、驛のひさしや、多賀さんの境内を行つたり來たりして雨空を見上げてゐたものだつた。

十月になつて、炭坑にストライキがあつた。街中は、ジンと鼻をつまんだやうに靜かになると、炭坑から來る坑夫達だけが殺氣だつて活氣があつた。ストライキ、さりとて辛いね。私はこんな唄も覺えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさつさと他の炭坑へ流れて行くのださうだ。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしまふので、めつたに坑夫達には品物を貸して歸れなかつた。それでも坑夫相手の商賣は、てつとり早くて、ユカイだと商人達は云つてゐた。

「あんたも、四十過ぎとんなはつとちやけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんなアタ……」

私は豆ランプの灯のかけで、一生懸命探偵小説のジ、ゴマを讀んでゐた。裾にさしあつて寝てゐる母が父に何時もかうつぶやいてゐた。外はながい雨である。

「一軒、家ちふもんを、定めんとあんた、こぎやん時に困るけんな。」

「ほんにヤカマシかな。」

父が小聲で呟鳴ると、あとは又雨の音だつた。——そのころ、指の無い淫賣婦だけは、いつも元氣で酒を呑んでゐた。

「戦争でも始まるとよかな。」

この淫賣婦の持論はいつも戦争の話だつた。この世の中が、ひつくりかへるやうになるといふと云つた。炭坑にうんと金が流れて來るといふと云つてゐた。「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にかう云はれると、指の無い淫賣婦は、

「小母つさんまで、そぎやん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げては淋しさうに笑つてゐた。二十五だと云つてゐたが、労働者上りらしいブチブチした若さを持つてゐた。

十一月の聲のかゝる時であつた。

黒崎からの歸り道、父と母と私は、大聲で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いてゐた。

「お母さんおははも、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」